

令和元年第1四半期を振り返って

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



元号が令和に変わって3カ月が過ぎました。しばらく間が空きましたが、今回の理事長トークでは、健育会グループの令和元年度第1四半期の状況や主なトピックなどについて、振り返りたいと思います。

健育会グループサイトのサーバー移管などを行っていましたが、ようやく一段落しました。しばらくお休みしていた理事長トークを再開します。まずは、健育会グループの令和元年度第1四半期の状況を説明します。グループ全体として、大変順調に推移し、中でも大きく貢献したのが、平成29年度に同時に開院したねりま健育会病院と湘南慶育病院の2施設です。健育会にとって大きな先行投資でしたが、開院から約2年たち、両施設ともほぼ満床と好調。一安心しています。医療の質に関しても、クリニカルアウトカムの成績が非常に良好でした。忙しい中、皆さんが勉強会などで頑張った成果として、私にも十分伝わっています。全てにおいて幸先良い令和元年のスタートを切ることができました。



今期は、“医療の特殊性”について改めて考えさせられるトピックが2つありました。1つは、懸案だった石川島記念病院の診療再開です。東京都の意向に沿って、9月1日から診療を再開する予定になっています。一般企業であれば、採算に合わない事業からは撤退します。しかし医療に関しては、たとえその地域に他の病院があったとしても、行政から指示を受けた場合などは、病院を存続させなければいけません。もう1つが、ある病院で起きた患者さんとのトラブルの対処に関して。治療を終えて退院と判断した患者さんが、病院を出て行かないということが起こりました。本来であれば医療や介護といった我々のサービスを提供する必要がなく、裁判所もこの件は不法占拠に当たると認定しています。しかし、医療法人の非営利性や人道的な配慮から、1カ月にわたって無償でサービスを提供し、先日退去いたしました。

この2つのトピックは、他の業種にはない医療法人の社会的使命について、その特殊性を再認識する良い機会になりました。



既に理事長トークでレポートしたとおり、「第13回TQM活動発表セミナー」(Vol.197)や「第13回看護・リハビリテーション学会」(Vol.199)、「第14回チーム医療症例検討会inねりま」(Vol.201)といった、毎年恒例のグループ内の学会が、今年も滞りなく開催されました。いずれも前回は上回る高いレベルの発表が行われ、同時に健育会職員の意識の高さを実感しています。中でも第14回チーム医療症例検討会inねりまでは、全発表に映像を使用したことで今まで以上にわかりやすくなり、皆さんの理解も進んだはずで、民間の医療法人でグループ内の学会がこれほど充実しているところは、他にないと言われており、高く評価されています。また、グループ内のあらゆる職種が参加して発表を行い、意見交換をすることで、まさに我々が目指している“チーム医療”を実践できていると感じています。

余談になりますが、最近話題になった渋野日向子選手の全英女子オープンゴルフ優勝について、ふれたいと思います。私はゴルフが好きなので、優勝の瞬間をテレビで見ていると、目頭が熱くなりました。一番痺れたのは、トップと2打差で迎えた12番ホールです。ミドルホールで1オンを狙い、見事に成功。イーグルパットはわずかに外れましたが、バーディを決めて追撃ののろしになりました。また、トップタイで臨んだ最終ホールは、グリーンオンがカップまで約6m。プレーオフになったら勝てないと思ったそうです。もし3パットして負けるとしてもこのホールで決着をつけようと、覚悟を決めて打ったバーディパットが入り、優勝をつかみ取りました。弱冠20歳の女性が、素晴らしいチャレンジ精神で新しい世界を切り拓いた姿に大変感動を覚えました。あのチャレンジ精神を、我々も見習うべきだと思っています。

渋野選手は、世界の大舞台でも笑顔を決やさずプレーしていたことも印象的でした。笑顔には、自律神経のバランスを整える効果があります。大きなプレッシャーがかかる状況でも笑顔でいることが、良い結果につながるということを彼女が証明してくれました。患者さんに何を言われても笑顔で接することは、患者さんはもちろん我々にも良い効果をもたらしてくれるのではないのでしょうか。

梅雨が明け本格的に夏を迎えてからは、各施設で開催されたマリクラブをはじめ、レクリエーション活動も充実していると思います。



第2四半期以後も“よく学び、よく遊び”を実践しつつ、予算をクリアすることを期待しています。